

**信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果**

プログラム名	グローバルエンジニア育成のための工学部マレーシア短期研修	
学部・研究科名	工学部	
実施期間	2016年8月31日～9月22日	
研修先(国・都市・施設名)	マレーシア クアラルンプール マラヤ大学・マレーシアブトラ大学	
参加者数：10名		知の森基金からの支援者：2名
プログラム概要	工学部では、夏休み期間中の2016年8月末～9月、マレーシアにある信州大学の学術協定校に10名の学生を派遣し、専門的な講義や実習を体験する約3週間の短期派遣プログラムを実施した。マラヤ大学・マレーシアブトラ大学に各5名が派遣され、大学内の学生寮で生活しながら、各自の専門に応じた英語で行われる授業を聴講し、実験や実習にも現地の学生に混じり参加した。マレーシアの歴史や文化、宗教を学び、また日本を発信するという文化交流を通じて視野を広げ、将来グローバルエンジニアとして世界で活躍するための課題や目標を見つけ、留学や将来の進路を探るきっかけとなる研修となった。	

実施状況・成果

◆事前ガイダンス(事前研修) (6/13・7/4・7/21・7/25の計4回実施)

本短期留学の目標・目的設定、海外渡航に関する安全指導、留学手続きや授業受講に関する指導、訪問国に対する事前勉強、日本発信のための資料作成等を行った。また、工学部English Café及びグローバル教育推進センター主催のPractical English Workshopにより英会話力の向上を図った。派遣先大学のシラバス等を利用し、事前に受講する講義を調べ各自時間割を設定、専門英語の予習等、授業受講に向けての事前準備を行った。

◆短期留学(8/31～9/22)

参加者はそれぞれマラヤ大学、マレーシアブトラ大学の学生寮で生活し、一般の学生と同様、各自の専門に応じた英語で行われる授業・実習・実験等を受講した。また、留学生を対象とした研修旅行や交流会等にも参加し、交換留学生の留学生生活を3週間に圧縮した「海外留学シミュレーション」を行った。今回の留学体験は参加者にとって今後の中長期の留学等を検討する契機となった。また自らの学業への姿勢について振り返った者も多く、帰国後の専門分野での目標がより明確になった、授業にもっと積極的に取り組んでいきたい等としていた。当初は生活習慣の違い、発音に特徴のある英語等カルチャーショックもあったようだが、次第に順応し、滞在後半には積極的に授業やスポーツ、寮生活を通じて現地の学生と行動し、マレーシアでの生活、習慣、宗教等を学ぶだけでなく、日本文化を紹介する等の文化交流も行った。異文化に直接触れ、理解し適応する中でコミュニケーション能力や問題解決力、柔軟性や積極性が養われ、今後グローバルに活動していくための素養を涵養することができた。

◆帰国報告会(10/24)

派遣先大学毎に、工学部に報告会を行う。(別に工学部English Caféにおいても、代表学生により英語の報告プレゼンテーションが行われる予定。)

学生の声①ー工学部 学生

私がグローバルエンジニア育成プログラムに参加しマレーシアのマラヤ大学に短期留学して感じたこと、刺激を受けたことはマラヤ大学の学生は積極的に勉強熱心であるということです。特にそう感じた場面はマラヤ大学で講義を受けた時です。講義の途中などで先生が何か質問はありませんかと言うとマラヤ大学の学生は次々にいくつもの質問をし、分からないところを理解していました。日本では質問する人が少ないのでマラヤ大学の学生の積極性に驚きました。また、日本語を学び始めて4か月という学生と交流した時も強い刺激を受けました。それは4か月だけしか日本語を勉強していないのに私と日本語で会話できていたからです。その学生の日本語を学ぶことに対する熱心な態度と集中力はすごいと思いました。これらのことを受けてただなんとなく学ぶのではなくマラヤ大学の学生のように熱心に積極的に目的を持ちさまざまなことを学んでいきたいと思いました。

学生の声②ー工学部 学生

初めは特に目的も考えずにこのマレーシア研修に参加を決めてしまっていた。しかし、実際に現地に行き学んだものは多かった。文化の違い、人柄の違い、気候の違いなど目を惹くものがたくさんあった。特にそれらを感じられたのは現地の学校においてである。マレーシアでの学校の授業と日本での学校の授業は似ているところもありながら、違いも多く見られた。まず学生の授業の参加の姿勢である。日本では多くの学生は静かに話を聞いて聞いたことを自分で考え理解するが、マレーシアの学生は少しでも疑問点があったらすぐに聞き、その場で解決させていた。もちろん自分で問題を解決するのににも利点はある。しかし自分だけで考えていても考えの幅は広がらない。様々な考え方に触れることで学べることも多いのだと思った。そしてもう一つ、授業の構成も違った。日本では定理や仕組みを教師が説明して、学生は覚えるだけだが、マレーシアの教師は、必ずどこかで考えさせる時間をとる。実際に授業では、この定義から考えられることはなにか、プログラミングとはなにか、など考えさせる場面があった。これらは学生の積極性の違いによるものなのだったと思った。学生が自分から考える、そこから学べることもあるということに気づくことができた。

キャンパスツアーにて(マラヤ大学)



現地学生と交流(ブトラ大学)

